

原爆の非人道的被害について－原爆は人間に何をなしたか－

2014年 2 月13日

メキシコ・ナジャリットで

田中熙巳 日本被団協事務局長

議長ならびに参加者のみなさん。とりわけ、原爆被爆者をお招きいただき、発言の機会を与えてくださったメキシコ政府に感謝申し上げます。

私は、68年余り前の長崎原爆の生き残りの一人です。日本被団協の事務局長でもあります。はじめに私の体験もまじえ、核兵器使用による破滅的、非人道的結果について証言いたします。

私は13歳の時、長崎原爆の爆心地から3.2キロの自宅で被爆しました。奇跡的に大けがを負うことなく助かりました。

爆発から3日後、親族の安否確認のため、爆心地帯に入り歩き回りました。爆心地から500メートル辺りの自宅焼け跡に伯母と従兄は焼死体でころがっていました。

700メートル辺りに住んでいた祖父は骨まで見えるほど焼け爛れ瀕死の状態でした。

その傍らで、3日間生き長らえたもう一人の叔母の遺体を茶毘にふしました。伯母の生前の姿が骨の形と重なり突然涙があふれ出し大声を上げてなき崩れました。

無傷で救援を求めてその場を離れていた伯父は10日を経ず高熱で苦しみ亡くなりました。

原爆は身内5人の命を一挙に私から奪いました。それぞれの死の無惨さと爆心地帯で見た凄惨な状況は68年を経た今も脳裏から拭い去ることはできません。

1945年8月6日と9日、広島と長崎に2発の原子爆弾が投下されました。原爆から放出された、核分裂のエネルギーは2つの都市を破壊尽くしました。強大な爆風と熱線と放射線は、そこで生き、働き、学び、遊びに興じていた子供たちの全てに容赦なく突然襲いかかりました。

野外で大火傷をおって地面にたたきつけられたり、倒壊した家の下敷きになって脱出できないまま焼死したり、強い放射線で細胞を破壊され、もたえ苦しみ死んだりしました。その日のうちに亡くなった死者の数は数万人に及びました。

原爆から放出された放射線や、放射性降下物からの残留放射線のことは、その頃は、誰も知りませんでした。

かろうじて軽傷でその日を生き延びることができたものや、救援に入った兵士や市外から来た市民の中からも脱毛や、下血、高熱など放射能の急性症状が現れ、生死の境をさまよい、死に至るものもありました。

1 945年の年末までの死者は広島で14万人、長崎で7万人余といわれています。

膨大な死者の数字だけにとらわれてはなりません。その数は人間としての尊厳を否定され、生きる望みを突然奪い去られた一人ひとりの人間の死の集積された数なのです。

「原爆は人間としての死ぬこと」を許しませんでした。

被爆者の体に入り込んだ放射線は、細胞を破壊し、遺伝情報を破壊し、免疫機能を破壊して、白血病にはじまりさまざまながんなどの後障害を引き起こし、あの日を生き延びた被爆者を苦しめ続けてきました。近年は非がんの疾患にも放射線の影響があることが分かってきました。被爆者は後遺症がいつ現れるか不安に苦しめられ、子や孫への影響も心配です。原爆は被爆から68年たった今日も被爆者に不安と痛みを与え続けています。

爆発直後の生死を分ける極限状態に直面した被爆者や救援や遺体の収容にあたった被爆者の中に、その時人間らしい行動を取り得なかったことが罪の意識となって長い間、苦しみつづけ、後遺症への不安と重なり「心の傷」は時々かさぶたをはがされるように、新たな傷となって、今日もなお癒されることなく続いているのです。

「原爆は人間らしく生きること」も許しません。

この言葉は原爆の非人間性を象徴的に示す言葉です。それにもかかわらず原爆の非人間性と正面から向き合い、たたかうことによって、人間らしく生きぬいた被爆者も少なくありません。

アメリカ占領軍は原爆の被害を隠蔽しつづけました。独立後の日本政府も被爆者を放置しました。ジュノー博士の国際赤十字委員会への支援要請も顧みられませんでした。原爆で家族や近隣の、職場や学校など様々な人とのつながりを破壊された被爆者は社会から孤立させられました。

日本政府が被爆者の医療対策を始めたのは被爆後12年たった1957年です。この時まで全国に被爆者は適切な医療、救援を受けることなく、社会的にも孤立し、誤解に基づく差別を受ける中、で病と生活に苦しみました、死に至るものも少なくありませんでした。戦争の中での非人道性は戦争終了後も残りつづけました。

1954年3月のビキニ環礁での水爆実験は、日本のマグロ漁船を含み太平洋上の広い範囲に死の灰による被災をもたらしました。この被災を契機に全国に原水爆禁止運動が広がりました。この運動に励まされ、全国の被爆者が声を上げ、被爆後11年の1956年8月、日本被団協を結成しました。その日以来、日本被団協は原爆被害への国の補償を求めるとともに、「ふたたび同じ苦しみを世界の誰にも味わわせてはならない」と核兵器の速やかな廃絶を求め、世界に向けて非人道的な原爆被害の真実を知らせる運動を展開してきました。

核兵器の使用は人間性を否定する行為です。人類が生存するためには、核兵器は使用されてはなりません。核兵器の使用を前提とする「核抑止政策」は人間社会が存続するための道徳に反します。

核保有国とその同盟国に訴えます。核兵器のない世界の平和と安全を達成するために、核抑止政策への依存をやめ、核兵器を直ちに廃絶することを決意してください。核兵器を地球上からなくすことこそが、人類が生存し続ける保証になるでしょう。

核兵器は実戦配備されたものも含め、現在も1万7千発あります。廃絶までの困難は山ほどあります。しかし、廃絶への決意を強固な意志としてもちつづけければ実現できないことはありません。

核兵器は人間が作ったものです、そうだとすれば人間が廃絶できない訳はありません。

核兵器のない平和な世界をめざし共に英知と力を結集しましょう。

ノーモア ヒロシマ、 ノーモア ナガサキ、  
ノーモア ヒバクシャ、 ノーモア ウォー